

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 プロジェクト研究(共同プロジェクト研究)
 2017年度研究【経過・**成果**】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名		
	文学部・教授		丸山 浩明 印		
研究課題	ブラジルにおける各国移民の非同化適応戦略とトランスナショナリズムに関する比較研究				
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2018年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏名		
	立教大学・文学部・教授		丸山 浩明		
	日本女子大学・文学部・教授		北村 暁夫		
	東京学芸大学・教育学部・教授		加賀美 雅弘		
	立教大学・ランゲージセンター・教育講師(ラテ研・研究員)		ドナシメント・アントニー		
	立教大学・文学研究科博士課程(超域文化学専攻)・大学院生		名村 優子		
研究期間	2016年度～2017年度				
研究経費※ (上段:支出金額)	2016年度	2017年度	年度		総計
	3,360,053	2,495,233			5,855,286
(下段:採択金額)	3,500,000	2,500,000			6,000,000

※1円単位で記入

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

トランスナショナリズムは、超国家的(越境的)な生活世界に形成された多様な社会ネットワークを拠り所に、多国籍で重層的なアイデンティティをもって生きる移民像の解明に有効なパラダイムとして、近年世界各地の移民研究で認知・援用されている。本研究は、ブラジルの移民研究に当該パラダイムを援用することで、国内の代表的な移民集団であるドイツ系、イタリア系、日系、ポーランド系、オランダ系などがみせるトランスナショナルな生活世界の形成過程とその特徴を、移民集団間の差異や関係性に着目して実証的に解明することを目的とした。おもな研究対象地域には、南部3州の中でも「エスニック・ラボラトリー」の異称をもつパラナ州を選定した。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[移民] [ブラジル] [トランスナショナリズム]

研究【経過・**成果**】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

【ブラジルにおける現地調査の概要とその成果】

1. 現地調査等の概要 (2016～2017 年度)

2016 年度は、丸山・北村の 2 名が、8 月 31 日～9 月 14 日の日程で、サンパウロ大学での招請講演とブラジル南部でのジェネラルサーヴェイを行った。調査地はおもにサンタカタリーナ州とパラナ州の海岸山脈およびその西方に広がる結晶質・古生代台地で、そこに分散立地するイタリア系 (7)、ドイツ系 (8)、日系 (5)、オランダ系 (1) の合計 21 移住地を巡り、基礎的な移民関係資料の収集や景観観察、聞き取り調査などを実施した。

2017 年度は、丸山が 8 月 19 日～30 日、名村が 9 月 23 日～26 日の日程で現地調査を行った。前年度のジェネラルサーヴェイで丸山は、サンタカタリーナ・パラナ両州の東部を南北に移動して多様な移住地を巡ったが、今回は東西に移動して両州の西端を流れるパラナ川に至るまでの内陸奥地を中心に、各地に散在するドイツ系 (4)、イタリア系 (1)、ポーランド系 (3)、オランダ系 (2)、オーストリア系 (1)、ウクライナ系 (7) の合計 18 移住地を巡り、基礎的な移民関係資料の収集や景観観察、聞き取り調査などを行った。また名村は、カストロ市における日系コミュニティの形成過程について、ACEC (カストロ日本人体育文化協会) やコチア青年を対象に聞き取り調査と資料収集を実施した。

2. 現地調査の成果

1) 年代・移民別にみる移住地の分布特性

現地調査や文献で確認した合計 66 移住地 (ドイツ系 17、ポーランド系 9、イタリア系 8、オランダ系 8、日系 5、ウクライナ系 18、オーストリア系 1) の年代・民族別にみた分布特性は、次のようにまとめられる。

サンタカタリーナ州では、東部の森林地帯を中心に 19 世紀後半 (1870 年頃まで) に創設されたドイツ・イタリア系の古い移住地が集積する一方、同州の内陸部には 19 世紀末から 1930 年頃までに建設されたドイツ・イタリア系移住地の混在地域が広がっている。

パラナ州には、19 世紀末から 1930 年頃までに建設された移住地が多い。ドイツ・イタリア系が卓越するサンタカタリーナ州と比べると、そこにスラブ系 (ポーランド系、ウクライナ系)、日系、オランダ系、イギリス系、フランス系などが加わり、まさに「エスニック・ラボラトリー」の異称にふさわしい多様な移民集団の分布域が形成されている。イタリア系は東部沿岸地域やクリチバなどの都市域を中心に卓越する一方、ドイツ系はサンタカタリーナ州に隣接する同州南部に数多く分布している。また、パラナ州の中部にはスラブ系、北部には日系、東部の都市近郊にはオランダ系の移住地が集中的に分布している。

サンタカタリーナ州の内陸部やパラナ州には、海外から直来の移民が創設した移住地に加えて、リオグランデドスル州やサンタカタリーナ州の古い移住地から転住した者が創設した移住地も多い。初期移民であるドイツ・イタリア系の入植地は、総じて土地条件の悪い森林地帯に多く、北イタリアの山間・丘陵地出身のイタリア系がブドウ栽培やワイン生産に活路を見だした一方で、穀物栽培や畜産に慣れ親しんだドイツ系は文化的・経済的に停滞したまま奥地に孤立することが多かった。後に彼らは森林地帯から台地へと転住し、大規模な穀物栽培や畜産業、農産加工などで持ち前の能力を発揮するようになった。一方、後発移民であるオランダ系は当初から果敢に草原地帯に定住し、母国の手厚い資金・技術援助や盛んな農業組合活動を背景に、広大な放牧地を活用した酪農経営や乳製品製造に力を発揮してブラジルの農業を牽引した。さらに、地味豊かなテラローシャ地帯に進出した日系は、綿、コーヒー、野菜、穀物などの栽培に貢献した。このように、移民による移住地 (土地条件) や生業選択の差異は、彼らの出自に起因する文化や母国との関係性に関わるきわめて興味深い重要な研究テーマである。

2) 入植者の出自にみる移民の多様性

今回の調査では、入植者の生活体験を国家 (nation) の枠組みで分断してきた従前の移民研究の限界を再確認できた。すなわち、イタリア・ドイツ・日本移民といった研究対象は、あたかも不変性や統一性により境界づけられた一つの単位であるかのような、国

研究【経過・成果】の概要 つづき

家の枠組みで括られた移民集団である。しかし、実際には国家という単位は他のユニットとの絶え間ない相互作用の中で、その性格も境界も自在に変えてゆくものである。

たとえば、ブラジル南部に西欧移民が大量に移住し始めた 19 世紀後半のヨーロッパは、多数の国家が統合と分裂を繰り返した激動の時代であった。イタリア統一は 1861 年、ドイツ統一は 1871 年の出来事である。このことは、ブラジルに渡った初期のドイツ・イタリア移民が、現在の国家の枠組みで表象される強い国民意識をもっていた訳ではなく、むしろ各移民集団の出自（出身地域）に規定される、より小規模で固有な言語・文化的特徴を背景とする民族意識のもとで、独自の生活世界を創成してきたと考えられる。

実際、1870 年代以降にブラジルの南部 3 州に入植した初期のイタリア移民は、その多くがヴェネト州やアルプス山麓の南チロル（トレンティーノ＝アルト・アディジェ州）などからの北イタリア出身者であり、サンパウロ州のコーヒー農園にコロノとして入植したおもに南イタリア（南部 6 州とシチリア）出身者とは、同じイタリア移民といっても民族・文化的に顕著な相違があった。厳密に言えば、南チロルは第一次世界大戦が終結するまでオーストリア＝ハンガリー帝国の領土であり、彼らがイタリア語の話者であったとはいえ、オーストリア・ドイツ系移民と民族・文化的な親和性をもっていたことは事実である。両者の接触領域（contact zone）における実証的なトランスカルチャーレーション研究は、ブラジル移民研究において必要不可欠である。

今回の現地調査では、ドイツ移民の多様性についても明らかになった。すなわち、移民が始まる 19 世紀のドイツは、ドイツ連邦（35 の君主国と 4 都市から構成される国家連合）が、ビスマルクの鉄血政策の下、普墺戦争（1866）や普仏戦争（1870）を経てドイツ帝国（1871）へと統一されていく激変期にあたる。このことは、イタリア移民同様、初期のドイツ移民もまた、ドイツ人という共通の国民意識を共有し得ない多様な出身者であったことを示唆する。さらに問題を複雑にするのは、ドイツ移民と総称される人々の中に、多数の「民族ドイツ人（Volksdeutsche）」が存在することである。具体的には、ヴォルガ・ドイツ人（Wolgadeutsche、ロシア系ドイツ人）やドナウ・シュヴァーベン人（Donauschwaben、オーストリア＝ハンガリー帝国崩壊後は、ユーゴスラビア、ハンガリー、ルーマニアに分断された）などである。

このような入植者の多様な出自は、宗教の多様性と相俟って、移住地での宗教実践や宗教景観の差異として発現している。イタリア系は総じてカトリックの影響を強く受けているが、ドイツ系はカトリックとプロテスタントが混在しており、入植時に宗派に基づき居住区と教会を分けるなどの対応が各地で行われた。ドナウ・シュヴァーベン人の移住地では、ルター派のプロテスタント教会とカトリック教会が、道路を挟んで並んで建設されていた。また、ヴォルガ・ドイツ人の中には、キリスト教徒でもアナバプテスト派のメノナイト（メノー派）がおり、彼らはドイツ語と異なるメノナイト低地ドイツ語（plautdietsch）を保持していた。さらに、ウクライナ・ギリシャ・カトリック教会に属するウクライナ系の入植地では、ビザンティン様式などの独特な意匠の教会堂が見られるなど、単純に国家の枠組みに収斂されない多様な移民の民族・文化が現存していることを確認できた。

3. カストロ市とその周辺地域での事例研究と今後の研究計画

上記 1)・2) で示したジェネラルサーヴェイの成果を、事例地域に即して具体的かつ詳細に解明するために、カストロ市とその周辺に居住するドイツ系（テラ・ノヴァ）、日系、オランダ系（カランベイ・カストロランダ）、イタリア系を対象に、移民関係資料の収集や開拓・営農史などについて聞き取り調査を行った。今後は、外部資金等を利用してさらに継続的に現地調査を深め、各移民集団の特性や移民集団間の相互関係について分析を進めることで、ブラジル南部の移民社会の全体像に迫りたい。

※ この（様式 2）に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 【雑誌論文】

- ・ Do Nascimento, Anthony. Les Prémices de l'émigration japonaise vers le Brésil : Le Japon et la «révolution des départs» (1868-1907). 立教大学ランゲージセンター紀要、37、17-31、2017.
- ・ 名村優子・アントニー・ドナシメント：1933-1934年のブラジル新憲法制定議会における排日運動と日本の外務当局の対応。立教大学ラテンアメリカ研究所報、No. 45、1-18、2017.
- ・ 北村暁夫：南米のイタリア移民－ブラジルとアルゼンチンを中心に。立教大学ラテンアメリカ研究所報、No. 46、1-13、2018.
- ・ 名村優子：ブラジル国パラナ州カストロ市の日系コミュニティ。RUGAS (立教大学地理人類学研究会) 34、1-20、2017.

② 【図書】

- ・ 丸山浩明：アマゾンの恵みと河畔民の生活。矢ヶ崎典隆・菊地俊夫・丸山浩明編『ローカリゼーション－地域へのこだわり』朝倉書店、86-99、2018。(日系移民の生存戦略)
- ・ 名村優子：女もブラジルを目指す－1920-30年代に日本力行会から海外へ渡った女性たち。ブラジル力行会『ブラジル力行会100年のあゆみ』311-341、2017.

③ 【シンポジウム・公開講演会等の開催】(2017年1月21日、於：立教大学)

- ・ 第47回「現代のラテンアメリカ」(ラテンアメリカ研究所主催)
- 第1部「日本就労現象とブラジル日系人社会」(二宮正人・サンパウロ大学教授)
- 第2部「南米のイタリア移民－ブラジル・アルゼンチンを中心として(北村暁夫・日本女子大学教授)」、
- [www.rikkyo.ac.jp/events/2017/01/qo9edr000000gt24-att/event170121_001.pdf]

④ 【その他】

《海外招請講演》

- ・ 日本学術振興会主催「I JSPS International Scientific Exchange Workshop」招請講演
2016年8月30日～31日、於：ブラジルサンパウロ大学法学部
[https://www.jsps.go.jp/english/saopaulo/data/IJSPS_ISEW_Aug2016.pdf]
 - [招聘講演1] Hiroaki Maruyama: Japanese Immigration in the Amazon－Analysis focused on the foreign relations. 2016.8.31、São Paulo.
 - [招聘講演2] Akeo Kitamura: Italian Immigration to Southern Brazil. 2016.8.31、São Paulo.
- なお、当日の招聘講演の内容は現地新聞にも掲載された。以下はそのアドレスである。
[<http://www.nikkeishimbun.jp/2016/160907-81especial.html>]

《研究会発表》

- ・ 名村優子：1933-1934年のブラジル新憲法制定議会における排日運動と日本の外務当局の対応。CHIR-Japan(国際関係史学会)研究会、2017年4月15日、立教大学。
- 《博士学位申請論文》
- ・ Do Nascimento Anthony: *Une Histoire de l'émigration, de l'immigration et de la colonisation japonaises au Brésil (1895-1942) : une autre histoire du Japon*. Thèse de doctorat en Etudes de l'Asie et de ses diasporas, remise au sein de l'Université Jean Moulin Lyon 3, le 22 septembre 2017, 464 pages.
フランスリヨン第三大学提出の博士論文(日本文化学専攻: ブラジル日本移民史)